

法要儀式に関する諸問題

— 法要儀式の「生活化」の課題に寄せて —

木 村 勝 行

(一)

本宗の法要儀式について、僧職にある者として、かつ信仰生活に励む者にとって、法要とは何か、一体、本宗の儀式とは何かというその由緒をたずね、その意味はどんなことかという問題が問われよう。

法要儀式に関して、僧職にある者ならば当然、その故実作法に熟達するし、そうあらねばならぬ。だが、法要儀式の意味を教義的に、あるいはその信仰生活にかかわって問うということになると容易ではない。

そこで、本宗の法要儀式について、①法要の本質・内容・機能と、②信仰生活の側面に着眼しながら考察を試みようと思う。

間接的には、僧職とは何かを問う問題になるのである。

法要儀式の研究態度として、僧職ということが払い切れるどころか、まさにそうした立場に立つ者であり、法要と信仰、儀式と信仰(行法)を思索することによって、法要儀式を執行する上でのマンネリ化を脱出したいと考える。

換言すれば、法要・儀式によって、式文・要文にあるように仏祖三宝礼拝、法華礼誦、仏徳讃歎、報恩感謝、祈願・回向を体験化し得るものだからである。個人的体験からリアルな生活次元への展開を志向することによる「法要・儀式」の生活化、純粹化を考究したいと考えるのである。

確かに、法要儀式は故中西本秀師が述べているように、「法要式は芸術」であると思う。中西師の「法要芸術論」をあげよう。

「法要式は芸術である。しかもそれは敬虔崇高なる信仰

を基盤とし、全身全霊を以って創造する。最も厳粛にして典雅なる綜合芸術である。若し法要式を以て、単に読経の形式化したものとするならば、それは、法要式の何なのかを知らざる者の言というべきである。」

また統いてこうも述べている。

「芸術としての法要式もまた、布教や教化を目的としたものではなく、三宝帰依の純一無雑なる信仰が、芸術として最高度に具現されたものでなければならぬ。そこにこそ、その芸術を創る人、これを觀賞する人が、無礙の三昧境に涵ることが出来るのであり、そしてそこにこそ、期せずして、教化というような副次的効果も生れて来るのである。」①

と、法要儀式は三宝帰依の純粹なる信仰による宗教芸術で、全身全霊をもって創造すると云う識見は傾聴に価しやう。

法要儀式を構成しているものは、僧俗の誦経、要文・式文朗唱、式文声明、各種仏具の運用、所作によって、仏教儀礼の厳肅な雰囲気造られ、法要の世界に摂入されるのである。寺院建築自体も、やはり法要儀式を厳修する場として建立されており、現在の寺院建築の主流の思想なのである。△寺院―僧職―法要儀式▽という形態において、今

日の寺院が存在していると觀察できるのである。

してみれば、寺院の法要儀式とは何か。いやまさに純一なる信仰表白としての法要儀式を創造するとはどういうことなのか。その宗教的な意味を尋ね求めることによって、寺院の法要儀式の形式化、様式化に墮するをさける必要があるとすべきである。

今日、宗派を問わず仏教寺院とその儀礼の社会的存在価値あるいは文化的存在理由が絶えず問題にされ、問われている時代であって、それらの問いに対応・対決する姿勢がのぞまれているのである。ことに、明白にされていかねばならぬ問題点は、仏教儀礼の宗教的意味なのであろう。

たとえば、一部いわゆる進歩的インテリによる△葬式無用論▽運動に代表される批判である。これらの問いに対して、かつ運動に対処して、これらの言論に鋭い緊張関係を保たざるを得ないと思うのである。

他方、もっとも日常的には、近代感覚から来る無駄ない合理的な生活をのぞむ時代観から、伝統的な法要儀式の簡素化論が出されることが多い。長時間、意味のわからない呪文のようなお経を退屈しながら聞く、よほどの忍耐が必要らしく、ついには「有難いところだけにしてほしい」「足がしびれて……」などになる。

こうした傾向は、若い世代の要求に代弁され、檀・信徒の老令化現象とともに、法要儀式の簡素化、平易化への傾向が強まっているのである。

法要儀式に関する近年の出版された典書を見るにつけても、儀式の差定は簡単なものへとという傾向が顕著である。

だが、法要儀式を重視する側からは——単に伝統墨守論からだけではない——「あまりに簡単すぎるのもよくない」といった反発から、かえって古式の法要儀式の典書を求める人も多い。こうした種々の動向を見ても、法要儀式に関する教団の明瞭な姿勢がのぞまれていると感ぜざるを得ない。法要儀式の作法上のびん乱もさることながら、法会・法要儀式そのものの本質が失われることがより自戒されなければならぬ時期にあると思う。

このような外的・内的な理由から、法要儀式の生命がどこにあるかを問うことは重要になってきていることは言うまでもない。

本宗の法要儀式の伝承について、ほとんど師弟相承、口伝によってきたといつてよい。ただ、今日の法要式よりみると、江戸期檀林制度下に、その門流、法類において法要儀式が創造され、定式化された法式が多少まとめて伝えられているにすぎない。それ故に法要儀式が、その本質や教

義との関連をもって整理されてきたことはない。

ただし、優陀那日輝師の「充治園礼誦儀軌」は、今後その業績が高く評価されてよいものであろう。明治以後、本宗の法要式の基礎をなしていることは、理由のないことではないのである。

真宗の「儀式条例」においても、私見では宗義学との関係が熟しておらず、天台、真言等の仏教各宗についても、同様の事情にあると思われる。それらの法要式考察の根柢は、法要儀式の繁簡、程度の差を云っているのではなく、その法式と信仰との不調和を見る。いわば宗義学的な検討がなされていないという問題が伏在しているのである。その法式は、法要にとって式次第、その順序になるのみならず、法要の重要な構成を定めているものであり、信仰表白においてどのような法式をもって具現されるのか。法要の営み方にかかわってくる問題なのである。

法式そのものは、信仰表白との直接的な関連をもったもので、現行の法式（要文・式文も含めて）自体、信仰表白によって吟味され、絶えず創出されていかねばならないのである。また信仰表白は決して、自分の「信心好み」によってそれを表現するということではない。その宗旨、教義という一種の公的な教えを信仰主体が受容するところから

なされるのである。すなわち、教義的意義づけがあつて法式がたてられ、信仰の深化と法式の創造とが密接な相互関係にあるとすべきであろう。

昭和十六年、日蓮宗三派合同が実現して、「法要式の統一」が問題にされた。「各々まちまちでは不便である」という実際の理由があつて、「宗定法要式」がのぞまれていた。だが、戦災の拡大と敗戦の打撃を受けて成就せず、関係者によつて昭和二十五年に現行の「宗定日蓮宗法要式」が編纂されたのである。後述するように「法要式の統合」ということは実に容易でなかつた。編集者である石井日章・高橋玄浄両師の「あとがき」②にのべている通りであり、その時点の課題がそのまま今日まで引き継がれていると云つて過言ではない。

更に、法要儀式の本質的な意味が問われているとなると宗祖の示された「法要儀式」とは何んであつたか、宗祖の「法要儀式観」（二）仏教儀礼観の時点までさかのぼらざるを得ない。しかし、今日の法要儀式が宗祖に源があつたとしても、法要儀式は、「宗教芸術」であると云うように、創作・創造の発展史がある。草山元政上人の創作になる要文・章句が、今日の法要式に散見することからも、法式の創造の事実を物語るものであり、その時代に生きた人びとを

感動せしめるに充分であつたと想像される。

であれば、宗祖とその後の変化・発展としての「法要式」を見る、儀礼史といったものからの教唆を受けて、信仰生活上の法要の意義が明確化、自覚化、内面化されねばならず、単に儀式本位にとどまるならば、ますます儀式の形骸化に拍車をかけ、法要の効果を損うことになるのではないかと思う。

△註▽

① 宗定日蓮宗法要式 跋より 三八〇頁

② 宗定日蓮宗法要式 編纂来由より、石井、高橋両師の勞を多としたい。この稿を起すにあたって参考にさせて頂いたことを付言する。

(二)

本宗の法要儀式に関する典書は数多いがその種はそう多くない。

現在、一般に使用されている主なものをあげてみると、「宗定日蓮宗法要式」以下、「日蓮主義信仰行式」「日蓮宗礼誦要編全」「日蓮宗法要式」「法華礼誦信仰要典」「法華回向文集」「法華礼誦要文集」「日蓮宗法華礼誦要文」「日蓮宗信仰要典」「法華経信仰要文」「法華宗法式作法要典」など、① 参考には「法要故実便覧」「法要儀式要

具の解説」がある。

これらの典書には、法式、要文類と一応の作法解説があるが、具体的には師資相伝、口伝によって習うのである。

例えば開経偈や四誓の意味、引導や回向の仕方などは師僧よりの口伝直授によっていたのである。であるからして、法要儀式の宗義学的な意味での問題解明に関する直接の典書はほとんどないといつてよいのであろう。だが、師僧よりの相伝であったとしても、前述の如く、宗義学の課題の一つとして把握し、われわれの信行増進に深いかかわりありをもった宗教儀礼と考えられるべきが妥当である。

法要儀式は、僧俗の営む法会∨の主要な要素である。

法要儀式の前後に説教、講話、法門談義が行われる法会∨の営み∨から、高座説教、法華和讃、題目踊り、題目太鼓（御会式太鼓）、説教節が生れたように、本宗の法要儀式の変化、発展はこうした僧俗の法会∨の営み∨から生れていことに留意すべきである。一方、法式、差定においても、法会における法要儀式の法式として伝承され、創作することによって僧俗の信行生活に大きな影響を与えてきた。当時の僧俗にとって法会にあずかることによって、信行三昧に深く入り、自受法樂を体験することができた主な由縁となったものであろう。今日、伝えられる法式、要文

法儀は宗学史上において注目できる先師の相承、創作が多く行学日朝、玄妙日什、草山元政、優陀那日輝諸師の作が多く運用されている。そこで、法会と法要儀式との関係について基礎的な考察をしよう。

宗祖の在世において、どのような法会が営まれていたか。遺文に出てくるのは八日講∨大師講∨など、僧俗信徒が集って講会を行っていた。この講会には法門の講義論談のみならず、講会の趣旨に沿った釈迦仏讃歎、天台大師讃を朗唱、誦経が行われており、講式のようなものが造られたのではないかと思われる。この推測をうらずけるものに、中山富木日常師の置文に講衆への遺誠がある。②

また、宗祖在世中に檀越らは法華堂を造立している。その法華堂ではどのような法会が営まれたか。知るべき文献はないが、後世に伝承より見るならば法華講会が行われ、講式もあって法華礼誦∨が厳修されていたのではあるまいかと考えられるのである。当時の講会の法要を見るべく、当時の史料にあたりと文献史料の限界につきあたるのである。しかし、宗祖の遺文の中で、講会における式文化、要文化への志向性、朗唱された要文ではないか。「御宝前」に捧げた勤行式のようなものはないかをさぐっていくと実に驚くべき事実を見出すことができる。「御宝前」におい

て宗祖が捧げられた要文、講会の法要であると断定して差支えないと思われる遺文がある。

講会あるいは法華堂におけるなんらかの法華儀礼が行われたであろうとの想像を、法式的存在を確定させることによって、儀式の源流を把握しようとするにある。

また宗祖の信仰生活において、その法華儀礼の本来のあり方、法式の本化的な創造をどのようになされたかを理解したいためでもある。

今日の「法要式」を先入感にするならば、およそかけはなれたような感がするかもしれないのであるが、宗祖の法華儀礼がよく出ていると思われる遺文をあげると、

弘安三年十一月二十九日付、富木殿御返事に注目する。繁をいとわず全文をあげて参考に供したい。

鷲目一結、莊嚴天台大師御宝前候了。

経云法華最第一。又云有能受持是經典者亦復如是。於一切衆生中亦為第一。又云其福復過彼。妙樂大師讚者積福於安明、誇者開罪於無間、等云云。記十云居方便、極位菩薩猶尚不レ及、第五十人、等云云。華嚴經法慧功德林・大日經金剛薩埵等尚不レ及、法華經博地。何況其宗、元祖等於法藏・善無畏等。是且置之。

厄ごぜんの御所勞の御事、我身一身の上とをもひ候へば昼夜に天に申候也。此厄ごぜんは法華經の行者をやしなう事、灯に油をそへ、木の根に土をかさぬるがごとし。願は日月天、其命にかり給へと申候也。又をもいわする事もやといよ（伊予）房に申つけて候ぞ。たのもしとをぼしめせ。恐々謹言。

十一月二十九日

富木殿

日蓮

真蹟完存（定本一八一八）

この遺文に宗祖の法華儀礼の真髓が、あますところなく述べられている御書である。宗祖の御書には「法華經の御宝前」という表現が普通であるが、これは天台大師講、天台大師の命日にあたる十一月二十四日に向けて講会供養の「錢」が下総国中山富木氏より、はるばる甲斐身延まで送り届けられたことに対しての返書である。富木氏は人も知る日蓮聖人の伝道初期からの外護の大檀越であり、日蓮聖人の晩年である弘安三年頃とすれば、富木氏にとって、御書中「経云法華最第一……伝教大師讀者積福於安明誇者開罪於無間等云云」の御文は、もはや熟知のことであり、富木氏は観心本尊抄をはじめ日蓮聖人の重要御書を与えられ

ており、御書には何回となく出てくる要文類であつてみれば別に珍らしくないのである。したがつて、どのように解すべきかという問題がある。

宗祖はいつも同じ要文類をくりかえし使用されるためにその思想の自己主張、我有大乘のごとくみられがちであり今日なおインテリにも他宗の人びとにも上慢のそしりを受けてきているところである。

しかしこれは、仏教儀礼の思想を知らないことからきたまったくの誤解であつて、天台大師の命日に日蓮聖人の営まれる法会の御宝前を財施で荘厳し、天台大師讚の法施をもつて荘厳する。儀礼・儀式をもつて荘厳されているのであつて、遺文中「経云法華最第一……」はその讚歎の文が△要文化▽△式文化▽しているのである。したがつて、天台大師の御宝前に朗唱されたであろう要文類の一部分とみるのが正当な解釈法則である。この要文の語義解釈にとどまらず、要文を書かれた宗祖の意趣はどこにあられたかを求めるならば、たんなる反復引用の経文、釈文ではないので、法華儀礼に沿つた宗祖の意趣を富木氏との関係において解釈できると思うのである。

宗祖の法華儀礼における要句、式文を推定することができたのであるが、法式そのものを推することは難かしい。

今日のような繁多、多様な法式ではなくおそらくもつと素朴な法式であつたと思われるのであるが、本宗の法式・儀礼において、礼拝、帰命、讚歎、祈願、回向、供養、報恩感謝、懺悔滅罪、誦誦、唱題、諷誦、誓願等の全体をその式文とかかわつて検討されるならば、身についた回向等の意味もわかり、法華儀礼の真義を解すことができると思われるのである。どのような宗教においても、その繁簡の差があつても宗教儀礼は不可欠のものであり、日常の信仰生活の中にとけこんでいる。その宗教儀礼のあり方こそ実に重大な問題だと云えるのである。

ひとまず、ここでは法華儀礼（法要）の順序、生起次第としての法式が大師講にあつたと推定しておこう。③ 続いて、御書のご文章は、富木尼の重病を祈願されている。このご文章も当代の国語（東国地域）で平易に書かれている祈願文の一部であらう。

宗祖の病氣平愈祈願を伝えている重要な箇所である。富木尼の病いは日蓮の一身の上と思ひ昼夜に「願くは日月天その命にかわり給へ」と祈願されている。日蓮聖人にとつてかけがえのない人の病いであつて、天の寿命にかえて富木尼の息災延命を祈る。△日蓮の祈願▽こそ、仏天への加護をこい願うとりつぎの祈願なのである。「仏天に申す」

という真剣な祈願の言上、素朴な表現のうちに切々たる訴えをなしている。そこには、まったく儀式本位がみられない。仏天への祈願にふさわしい儀礼態度がある。つまり、宗祖には儀式以前に仏教儀礼の生活化、倫理化がなされていた。ことに仏祖三宝への祈願において、人が好む儀礼ではない。仏祖三宝が納受されるにふさわしい經典による儀礼・祈願であった。

今日の法要儀式における祈願ということについて、その法式の検討、生活化が充分吟味されねばならない理由である。④ 少くともこの御書によって、従来の法要儀式の形態化、様式化を反省する糧となり、法要儀式の簡素化、生活化という課題も、宗祖の法華儀礼に学ぶことによって法要儀式の生命を再生させ得ると思う。

△注▽

- ① 法要式はほかにもあるが、代表的なものと思われるものに止めた。他意はない。
- ② 中山法華経寺史料、宗学全書
- ③ 宗祖御遷化記録（日興筆）大聖人御葬送日記（日位筆）二書によって、宗祖の葬儀次第を知る。法会の法式の存在は確実にすべきである。

④ 付言すべきことは祈禱である。先の御書からしても、宗祖は伊予房に祈願を命じた。本宗の修法上からは、この事例は別

願にあたる。いかなる修法か推すること容易でない。しかし修法の仕方をも別にして、本宗の祈禱の原点となるもので、修法の方法上の変化にこだわっては祈禱の本質が失われよう。それは最勝修多羅としての法要を修する真秘の意味が、一種の技法に惑わされて感得されないうらみがあるからである。「日月天、其命にかわり給へ」の御文、思議によって解し得ない宗祖の密教の世界がある。

(三)

本宗の主な法会儀式を四類に整理する。それは前述のごとく、今後の法会儀式のあり方を模索し、法会儀式を媒介にした僧俗共通の信行増進が向上する方向において、その理論的根拠を考えたいための仮の整理を試みたにすぎず、本宗の今日的な法要儀式大系樹立へのステップになれば幸いである。

そこで、現行の法要儀式法を大観することによって四類し、その法要儀式の生活化、純粹化への反省と本質的改革の時期にあることを指摘したい。前節でのべたように、宗祖の法華儀礼観を基礎に現行法会儀式を改変、現代的な法要儀式創造に寄与することを目的としたい。

法要儀式（法会）の四類、

① 宗門年中行事に関するもの

② 個人・集団の信行増進に関するもの

③ 僧俗の人生過程に関するもの

④ その他、特殊な法会儀式

の四類である。若干の説明をすると、①が季節行事であり、仏教各宗共通に挙行しているもの、彼岸やお盆である。ほかは釈尊、天台大師、宗祖の聖日によるもので、本宗の聖日儀式を定めたものである。②は信行増進を目的にした法会儀式である。③は信仰生活において行われる法要儀式をあげた。④は①～③に入らない特殊な儀式である。

以下、現行の法会儀式のあらましを見よう。

① 宗門年中行事と法会

一月 元始祝禱会

二月 節分会、釈尊涅槃会、宗祖降誕会

三月 彼岸会

四月 釈尊降誕会、開宗会、羅什三蔵会

五月 伊豆法難会、

六月 伝教大師会、身延入山会

七月 願正会、盂蘭盆会、宣正会

八月 松葉ヶ谷法難会

九月 彼岸会、竜口法難会

十月 宗祖御会式、佐渡法難会

十一月 東条法難会、天台大師会

十二月 釈尊成道会、歳末祈禱会

② 個人・集団の信行増進のための法式

朝昏礼誦式（勤行式）礼法華儀式誦法会、祈禱会、題

日講、誦誦会、信行法会

③ 僧俗の人生過程に関するもの

帰正式 得度式 成年式 結婚式 相続式 祝寿式

病氣平愈祈願式 臨終正念祈願式 葬歛式 追善法要

式 各種奉告・祈願式

④ 特殊な法要儀式

放生会 施餓鬼会 畜生済度式 地鎮式 落成式 入

仏式 除幕式 起工式 開堂式 晋山式 就任式 開

眼式 記念式 上棟式 発会式 祝賀式 追悼式等。

ほかに本山由緒寺院において厳修された法会儀式には、法華懺法会、法華觀心讚、五種法師解説法則、如法経供養（十種供養）曼荼羅供養、千部会など、また日蓮宗に伝えられた八論義には、法華経十講、法華八講、法華礼講法式（本門三品）そのほか御書、経疏の礼講法式もある。しかし今日ほとんどこれらの法会は見ることができない。明治維新以後衰微の一途にある法要儀式になりつつある。うち復興されようとしている法式もないわけ

ではない。

①宗門年中行事に関する法会儀式において、季節行事は国民的な行事でもあり、寺院との関連が深い、密接不可分になっていることは言うまでもない。年始、節分、彼岸、お盆という季節行事が寺院において、どう営まれるべきか

重要な社会的、文化的意義を有する。そうであってみればこれら季節行事に営まれる法会儀式の有義について充分に検討に値しよう。次に聖日行事であるが、釈尊、天台大師宗祖、諸先師の聖日にあたって法要儀式が修せられる。高德を追慕し、讃歎、報恩感謝をその趣旨とする。このように年中行事と関わって、本宗の法要儀式が執行されるのであるが、行事の趣旨と儀式との意味をもった関連がのぞまれる。讃歎には梵讃、漢讃、和讃があり、本宗の儀式では梵讃、漢讃が多く使われているが、一般にわかりにくいと受けとられがちな欠点がある。だが口語訳にすべきだと云った議論にも、普賢呪讃（梵讃）の訳など限界がある。むしろ、現代語による讃が創作されるべきであろう。たとえば、宮沢賢治の法華堂建立勸進文などあまり知られていないのが実情であるが、非常にすばらしい法華讃である。

また和讃はまだまだその生命を持っている。いずれにしても漢の和讃を問わず慶讃文と同様、創作されるべきであ

る。なぜならば、行事の趣旨と法要儀式をつなぐ非常に重要なパイプだからであり、儀式中の讃歎には僧俗共に朗唱するような法会が、本来の儀式、法会のあり方ではなかったかと思われるからである。

次に②個人・集団の信行増進に関するものについて、その法式、式文の意味と僧俗講衆の信仰生活とかかわって十分検討されるべきであろう。小論の問題発想も自己の信行生活の問題から惹起したものであることを告白する。法会において、その法要に対する尊重の僧俗の態度、儀式の厳肅さは自他の信心を起すものであり、やはり感動を与えずにはおかないだろう。それ故に法要行軌の熟練が僧職にのみまれるのであるが、法要尊重の立場が叙情的段階に止まらず、法要の本質に迫って法華儀礼の性格を把握する必要がある、法要儀式尊重の法華儀礼の立場が信行生活上鮮明にされなければならぬだろう。

法華の祈りを生活原理にした宗祖の日常を想像するならば、朝昏礼誦法式、題目講式、信行法式の広略を問わず、われわれの信行生活にかかわって法要儀式の重要な課題とすべきであると思う。

朝昏礼誦式（勤行式）をあげ、その法式を考究してみよう。

法式

- ① 勧請 (奉請)
- ② 三宝礼 (礼拜)
- ③ 開経偈 (讚歎)
- ④ 読経 (読誦)
- ⑤ 祖訓 (運想)
- ⑥ 唱題 (正行)
- ⑦ 回向 (啓白言上)
- ⑧ 発願
- ⑨ 三帰
- ⑩ 奉送

朝夕の勤行式は云うまでもなく日常の信行を表現するものであり、その法要の本質は法華礼誦と規定されている。

すなわち、本宗の法要儀式の本質が法華礼誦にあり、あらゆる儀式を貫く根本精神であり、法要の世界を構成する内容なのである。したがって、このような法要の本質によって規定される本宗の信行の性格は、△礼誦▽を基本行法とするものである。朝夕の法華礼誦にはどのような法式がふさわしいか。時・場所・人によって多様な法式が創造されよう。

現行の礼誦法式は、天台大師の摩訶止観の「十正修」に

範をとり、これを基盤として十項目より成り立っているのである。右にあげた例がそうである。つまり、十項目は礼誦法式の正修という位置づけを与えているものであり、この十項目を実践することによって本宗の法華行法を修することになるのである。

現行の宗定法要式をはじめ、法要儀式の典書は日輝上人の「礼誦儀記」による礼誦法式の伝統に立つものである。

したがって、本宗の礼誦法式は天台の摩訶止観に起る天台教学の伝統を受容されているのであり、行軌作法についても同様に、摩訶止観に説く「二十五方便」を「五方便」あるいは「七方便」に簡略化して伝えているのである。しかしながら、本宗の法要式は天台の伝統そのままではない。

前述のように宗祖の深い法華礼誦観とかかわって天台教学が摂取されたのであって、本宗の法要儀式は宗祖の礼誦観を原点として創造・発展・変化してきたのであった。「礼誦儀記」(輝師著)の「十正修」中、読誦と唱題において正助二門の立義も宗祖の礼誦観との関連があって、五法三意(儀記)が立てられたことに起因するのである。

次の礼法華儀式について、法華礼誦による懺悔を意趣とする儀式で、毎月一日あるいは十五日の精進会に営まれた法要である。法式によってみれば、信行増進を目的にして

懺悔滅罪が行われていた。

法華礼拝、誦経によって、「我れ一切衆生と無始よりこのかた真心を迷失し、生死を流転す、六根の罪障無量無辺。……中略……過・現・未來三業に造る所の無辺重罪皆消滅するを得ん」と、「身心清浄」「自他の行願」を成就する。懺悔なのである。三業の重罪を消滅する行法として執行されるこの法要は、あまりに儀式化されているためか。本来の、懺悔の意味が失われてしまったように思われる。儀式中心の今日の寺院において、礼法華儀式を見ることはまずない。中絶状態にあると云ってよい。しかし、信行を重視する立場から、懺悔滅罪は宗祖の基本的な教義であり、従来の儀式そのままでもなく、懺悔が意味を再生させるような法要がのぞまれているのではないか。問題喚起としておきたい。

礼法華儀式は法華懺法の伝統に立っているものであり、法華懺法は南岳大師の法華懺法以来、天台大師に伝えられ天台大師撰述の「法華三昧懺儀」日本天台の法華懺法の變遷の流れを汲んでいるのである。天台大師の「法華三昧懺儀」を簡略化し、それを儀式化してしまっているのである。

この礼法華儀式が衰微し、信行式が新たに造られたのも

法要式それ自体、生命を失う理由が存していたと考えられる。教義上、信行上、法華懺悔は不可欠であると判断すると、儀式芸術としてではなく、信仰精進によって復古されるべき法華儀礼ではないかと思うのである。宗祖の懺悔滅罪への強烈な信仰態度を、仏祖三宝のまさに納受されるような儀礼に含有して創造されなければ、生活化への方向もかつまた法要からくる感動も稀薄なものに墮してしまっているのではないかと畏れる。

(四)

法要儀式とは何か、前節にて本宗法要式を大観することによって、日常における信行精進とのかかわりあい重視する視点から、二、三の問題点、反省点を抜き出すことができた。

思えば、信仰生活に生きるといふこと、それ自体、弛緩怠惰、マンネリ化を本質的に畏れる。したがって日常の信行精進に関する敬虔な内省こそ、より重要な意義を含んでいる。

古来、寺院における僧風のあり方を規定して、給仕第一信行第二、学業第三と称している。その場合第一要諦としての八給仕(侍)∨とはどのようなことか。それは仏祖三宝につかえるということであって、日常仏事を務めるので

ある。その行軌作法は鳴鐘、聽鐘、洗面、淨身、漱口、洗手、食方、淨髮、獻華、供物、供茶、供膳、獻灯、燒香、洗浴、上廁、就眼など、朝夕の給仕生活を第一とする。給仕の占める位置は給仕の要偈とかかわつて仏祖三宝への奉仕を意味する。寺院生活における僧徒の日常行為を給仕と意義づけられているのである。仏祖三宝にささげる行為としての給仕は前述のごとく、仏祖三宝を礼敬する没我性によって貫ぬかれている。礼敬の行為はすべての道徳行為の首位にあるものとし、仏祖三宝に対する義務を果たそうとするのである。仏祖の偉大さを敬慕し、礼拝する内的精神が、多面的姿勢にあらわし、△給仕▽とするのであるが、それは内的精神を示す給仕要偈と一致するのである。

寺院生活における給仕は、人間の義務道徳として、敬仏を最も崇高な徳とみなし、全生活を仏祖三宝に向けて、仏祖三宝のみを目的行為とする生き方なのである。

したがって、給仕第一の精神は仏祖三宝への帰依、礼拝の日常的行為なのであり、仏教倫理の重要な内容とされているのである。

また帰依の行為は信心と云われ、その場合宗教感情に重きを置いて見られるのであるが、もっと深い意味の有することが、寺院生活と給仕を考究することによって理解でき

よう。

帰依三宝によって人間の全生活を規定、支配すべきものであるとすればそこに倫理化、生活化という問題がある。

いわゆる仏事と人間の生活とはまったく別々のものではない。仏の教化にあずかることによって、引き起される帰依は帰依の行為をうながすのである。こうした帰依の行為を観点とするとき、仏事も生活も、いわばすべての生活は帰依行為と無関係ではない。むしろ、生活の全面を合一しすべてを仏祖三宝にふさわしく礼拝するという回小向大の目的に導くのである。

宗祖の帰依行為は、宗祖の出家、意欲的な勉強を生み、権大乘より実大乘への確信、法華經の行者へと自覚的帰投をすすめられた志向をみると、全身全霊にわたつて帰依の生活化をすすめた結果であり、仏祖三宝への帰依を意味するのである。

つまり、絶えず仏の教化にあずかることによって、宗祖の帰依行為が専持法華（題目）への昇化を堅めていったのであった。法要において礼敬を基盤とし、仏祖三宝に捧げる、納受されるという法要の本質は、仏法の精隨、エキスカつまた最勝修多羅、真秘という意味を含有し尊重するのである。

本尊・釈尊が△法要▽を納受されるとき、法要の目的を成就する。提婆品には八才の竜女の捧げる宝珠を納受されたことが説かれている。だが、しばしば經典には釈尊が納受されない場合があることを説く、「止ね善男子」がそれである。そこに仏祖三宝にふさわしいところの帰依、祈願回向等を含んだ本化の法要を嚴修するという問題がある。

本宗の教義上、法要は法華礼誦にあるとてきた理由もその法要が仏祖三宝に納受されるとの確信からであって、確信の基礎には仏の教化を受得して、その効果と云ってよいところの帰依三昧に住するからである。

換言すれば、仏の教化と帰依三昧の二柱にかけて安住する境地を保持する以外に、仏と衆生の間を結合させる法要あるいは儀礼の意味はまったくないのである。

法要儀式は、本尊と仰ぐ仏とのかかりあいにおいて、その慈悲、加被を受ける仲立として法華儀式がある——と考えておく——△仏▽と△人▽の一如、感応道交を実現するドラマが法華儀式なのである。

法華經の説相にある法華儀式の世界を、法式化、儀式化をすることによって、法華儀式の世界を体験させるのである。本宗の法要式の性格を法華礼誦、法華儀軌とする理由も、法華經が釈尊の至上の説法であるという宗祖の教義に

起因するのであり、過去、現在、未来三世にわたる釈尊の「常説法教化」（寿量品）を法会の集りにおいて、具体的に体験することができる唯一のものとして法華礼誦を行ずる。釈尊の常説法教化にあずかる義において、法要儀式があるとせねばならないのである。

したがって、まさに法華礼誦が本宗の全儀式の基調となるものであり、儀式作法が時代に対応して「簡素化」される種々の音楽、芸術の要素を摂取し改良されようとも、法華礼誦の精神が継承されなければならないのである。

釈尊の教えは、釈尊滅後のわれら衆生に対し、釈尊の慈しみの心をして△法華經▽が存する。その法華經が教えるところの「常説法教化」であって、その説法は△仏の梵声▽として存する。靈山における釈尊の説法を聞くとき、△梵声▽を媒介に聞法することができるのである。釈尊の梵声（肉声）による説法の法華儀式は、法会中における法華經誦誦の響きと一如のごとく観ずるのである。元政上人の誦經文（草山礼路第七）に

「所謂歌三誦法音^{ソウゴ}、以此為三音樂^{スミ}者耶」と、

法音である法華經を歌誦し、法会内外の四衆が聴法する。法華經の文、一偈一句たりとも衆生を利益する、まさに經文を持する△功▽は最上の徳であると叙述されている。南

岳、天台、妙樂、伝教大師の法華経讀の要句のごとく法華礼誦の△功德▽、その功といひその徳といひこれにすぎたる△功德▽はほかにない。

法華儀式の効果は法華礼誦の意思に立つて広く衆生が教化されるのだと叙述されているのである。法華儀式における読誦の意味を通して、「常説法教化」を内面化させ強烈な信仰の三昧の境地を創造するのである。法会そのものが釈尊の三世説法の儀式の世界として内的に構成され、法要への敬虔、没我、尊重を体験されなければならないのである。

元政上人の誦経文が、読誦とは何か、元政上人の豊富かつ鮮明な信仰態度を感じさせらるのである。△誦▽の行爲が法音の△誦▽と受けとめる基点を以て「音楽とする」のであって、△誦▽行爲については法師品に説くところであり、法華経読誦は法音の読誦であり、釈尊の説法の再生実現としての読誦行爲なのである。

確かに本宗の法要儀式において、行軌作法の基本に「音调」が重視されていることは「法音の歌誦」の意味を重んずるからなのである。

釈尊の説法を法要において、音声という感覚を伴った形で聞法を体験する。そこには靈山虚空会上の聴衆と同位の

信仰三昧を体得し得るのである。われわれの信仰の由緒とその意思の把握への努力において、法要儀式の生活化への方途をさぐり出すことができよう。

(了)